

「西郷隆盛も認めた橋本左内」

平成 30 年 11 月 18 日志雲会 清見義郎

<生涯>

- 1834 年 越前福井藩で奥医師（外科医）の子として生まれる。
- 1849 年 大阪に出てきて適塾にて学ぶ。
- 1852 年 父の病のため帰藩、父が死に藩医になる。
- 1854 年 江戸に遊学、坪井信良の塾から杉田成卿に師事、蘭方医を学ぶ。
- 1855 年 松平春嶽の書院番に登用、士分となり、その後江戸出府。この頃藤田東湖・西郷吉之助らと交友を深める。
- 1857 年 藩校明道館の学館同様心得となり、教育改革に取り組む。この頃から將軍継嗣・外交問題で松平春嶽を助け、横井小楠と共に一橋擁立・開国論を展開。
- 1858 年 日米修好通商条約締結。
- 1859 年 安政の大獄で斬首。

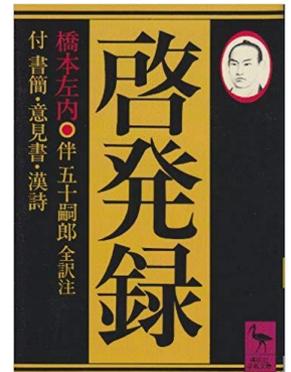


※時系列の流れを解り易くするため、あえて西暦で表記しています。

<啓発録>

啓発は論語の「憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず、一隅を挙ぐるに、三隅を以つて反せずんば、則ち復びせざるなり。」

意味は「理解できずいらいしなければ、教え導かない。うまく表現できなくて口ごもらなければ、教え導かない。四隅のひとつをあげて示すと、(残りの) 三つの隅をもって (推論して) 問い返さなければ、二度とは教えない。」から引用。



1. 稚心を去る（去稚心）

稚心（子供のままの気持ち）から卒業して父や母に甘えることなく勉強や習い事を熱心にやらなければならぬ。稚心を取り除かなければ、いつまでも腰抜け侍のままである。

2. 気を振るう（振気）

ここで言う気とは人に負けまいと思う心で努力せず負けるという事は恥ずかしい事であり、気を振るい起して負けない決意を忘れぬことが大切なのだということ。

3. 志を立つ（立志）

生き方の決意を固めるということ、常に自分達をかえりみて足りないところこそ努力することが大切である。

4. 学に勉む（勉学）

勉学とは書物を読んで知識を深めることだけではなく、忠孝の精神を養い、文武の道を修行することが大切である。

5. 交友を択ぶ（択交友）

自分が交際する友人には、益友と損友があり、益友には積極的に交わりこれを大切にし、損友がいたらこれを正しい方向へ導いてやらねばならない。

橋本左内が15歳の時に歴史上の人物に比べ自分がなんと取るに足らない人物なのかを憂い、奮起するために書いた書。要約すると先の内容になるが、実際は細部に渡りきめ細やかな心得が書かれており、歴史観・人生訓も多く含まれている。特に武士に対しては厳しい認識をもっており、2では「長く平穏な時代が続くうちに、武士本来の気風が衰え、気力も弱々しくなり他人に媚びへつらい、武士の家柄に生まれながら武道の修行を忘れてしまい、出世を望み遊興におぼれ、何事もまず損得を計算し、ことの是非を二の次にして大勢につくといい情けない武士が多くなった。」と指摘している。

<橋本左内の外交観と国家観>

その先見性と現実性には驚嘆すべきものがある。イギリスを最大の脅威と捉え、アメリカを手なづけイギリスの横暴を抑え、その間にロシアと友好を結び独立を保つ。たとえ一戦交えることになっても後ろ盾があれば国を失うまでには至らず、それにより我が国は弱を強に変える一大転機になる。

また、独立を保つ方法としては蒙古・満州・朝鮮・インド・アメリカ大陸の一部を属領としなければ不可能とまで言い切っています。(参考図書 66ページ 参照)

将軍継嗣問題も将軍候補者の中から有能で最適な人物を天皇が指名すべきと、あと国内政治には松平春嶽・徳川斉昭・島津斉彬を事務宰相とし蝦夷地開発には山内容堂・伊達宗城を外交担当には鍋島直正、他全国から有能な人を探しこれにあてる。まさにオール日本で対抗する。

この壮大な構想をまずは主君を当代一の名君にし、並み居る諸侯を手なづけて実現する事まで考えていた。

適塾時代に英語・オランダ語・ドイツ語に通じ、夜は市井の人の治療をするなど、緒方洪庵にして「池中の蛟龍」と言わしめたその才は当代随一であった。

西郷隆盛もその才を認め橋本左内の死を知った時、大久保利通に送った手紙にこう書き記しています。

「橋本迄死刑に逢い候儀案外、悲憤千万堪え難き時世に御座候」

辞世の句

「二十六年夢の如く過ぐ、顧みて平昔を想えば感ますます多し

天祥の大節かつて心折す土室猶吟ず正気の歌」

最後に西郷隆盛が

「先輩においては藤田東湖に服し、同輩において橋本左内に服す」と評した西南戦争で自刃した時に見つかった書簡の一つに左内の手紙もあったそうです。

参考図書

「啓発録」伴五十嗣郎 全訳注 講談社学術文庫